



出席者

## 清家 篤 *Atsushi Seike*

慶應義塾大学商学部教授・慶應義塾長

1954年生まれ。1980年、慶應義塾大学商学部助手。その後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校客員研究員、慶應義塾大学商学部教授、経済企画庁経済研究所客員主任研究官、慶應義塾大学商学部長等を経て現職。『エイジフリー社会を生きる』（NTT出版）、『60歳からの仕事』（共著、講談社）等著書多数。

## 大津和夫 *Kazuo Otsu*

読売新聞東京本社編集局記者

1969年生まれ。1993年、読売新聞東京本社編集局入社。政治部、社会保障部を経て、2010年11月より地方部勤務。2004～05年、米コロンビア大学院客員研究員。雇用、少子化、年金が取材テーマ。著書に『介護地獄アメリカ』『置き去り社会の孤独』（いずれも日本評論社）。

talk

対談

# バトラー博士が残したこと これからの日本への 様々な提言

高齢者の知識や経験の活用が個人と社会を豊かにすることを、半世紀前に力強く宣言したロバート・バトラー博士は、しかし同時に「老い」に対するネガティブなイメージは、実は我々自身の中で生み出されていることを見抜いていた。

いたわりよりも活躍の機会を、と訴える博士のまなざしは高齢者一人ひとりの尊厳と誇りの回復に向けられている。

博士の主張を再確認するとともに、高齢化先進国日本の課題と今後の方向性について、バトラー博士の警咳に接したお二人に語り合っていた。

### 「生涯現役」を自ら実践

清家 ● バトラー博士とは、今年の1月にダボス会議でお会いしたばかりだった。その際にILCをご自身の母校であるコロンビア大学に移管することを、とても嬉しそうに話しておられた。亡くなられたと聞いて驚くとともにまさに生涯現役を実践しておられたのだと、非常に深い感慨を覚えた。

博士は、最近の論文でギリシャの財政危機などの根底には高齢化の問題があると指摘しておられたが、まさに象徴的な出来事だと思う。要するに19世紀のシステムをそのまま21世紀にスライドさせてきたことが、今のギリシャの例に代表されるヨーロッパの財政危機の背景にあるということであつた

同感だ。

昔は引退は一部王侯貴族の特権だった。しかし19世紀末から始まった年金制度の導入により、死ぬまで働きづめだった一般の人にも引退生活が可能になった。それまでは、引退の権利という考え方がなかったため、その選択肢が与えられたことはまさに19世紀、20世紀の社会の進歩だったのだ。

ところが年金の発達と並行して、労働者に引退の権利があるなら、雇い主が労働者を一定の年齢で辞めさせる権利もあってもいい、という考え方も確立されてきた。そしてある時期までは、引退の自由を確保するプラスが、働きたいのに働けなくなるマイナスを上回っていたが、バトラー博士が高齢者の雇用の問題を提起し出した1960年代頃か

ら、明らかにバランスが取れなくなってきた。

特に先進国はどこも高齢化して、働き続けたい人達から働く権利が奪われるデメリットのほうがどんどん大きくなり、21世紀の今日ではそれがますます顕著になっている。

興味深いことに、バトラー博士は高齢者が働き続けられなくなることを、経済的な視点からだけでなく、高齢者本人の喪失感や人間としての無念さに、むしろ力点を置いて考えておられた。

私はバトラー博士の真の偉大さは、高齢社会の様々な課題に対して、あくまでも人間を中心にした発想とアプローチで考えておられたところにあると思う。

**大津**●まさにそれがバトラー博士の真骨頂だと、私も思う。

2008年に博士にインタビューした折に「エイジズムという言葉を作られて40年が経ったが、何か変わったか」という問いかけに対して、「法整備はそこそこ進んでいるが、世の中の姿勢は実はあまり変わってない。それこそがまさにエイジズムだ」とおっしゃっていたことが、強く印象に残っている。

博士は法律を作るのも大事だが、人々の意識や姿勢を変えていくことのほうが大事だということを強調しておられたが、「古い」というのは、僕らメディアも含め外的なものが

作り出しているのかもしれない、と改めて思った。「古い」は作られる、ということだ。

清家先生のご尽力もあって、日本でも年齢差別の撤廃に向け、徐々に努力義務から禁止規定になったりはしているが、本音ベースで取材すると高齢者に対する意識や姿勢は依然として変わっていない。

犯人捜しをしてもしかたがないが、自戒を込めて申し上げますとやはり伝える側である我々メディアも、高齢者に対する意識というか認識が十分ではなかったかもしれないと感じている。

例えば、65歳以上=高齢者と簡単にくっつけてしまうが、65歳を超えたら精神的、肉体的に大きな変化があるかというとなんかことはまったくなく、ただの人口学的な整理にすぎない。そうしたことに意を砕かずに高齢化が大変だなどと伝えているうちに、誤った概念が浸透してしまったのではないか。

バトラー博士は全米のジャーナリストを対象にしたセミナーを毎年開催していた。高齢者とは何か、高齢化するとはどういうことか、社会の高齢化と個人の長寿化の違いなどを学ぶセミナーで、もう10年以上継続されているという。博士は人々の意識や認識に働きかけるメディアの役割の大事さを、誰よりもよく理解していたと思う。伝え方によっ



バトラー博士にインタビューする大津氏(2008年)



博士は高齢者の様々な問題を、常に人間を中心とした発想とアプローチで考えていた。

て、人々の意識がどれだけ変わってしまうか、いわゆるマインドセットの重要性を我々に強く意識させてくれたと思っている。

### プロダクティブ・エイジングの意味

**清家** ● 私自身は、それまでもピュリッツァー賞を受賞された著書などで、その存在は知っていたが、初めて博士にお会いしたのは1994年にニューヨークで開催されたシンポジウム「活力ある高齢社会を目指して」でのことだった。その基調講演においても、博士は「プロダクティブ・エイジング」について改めて強調された。

一般的には高齢者といえば、かわいそうな人、保護すべき人というイメージが強くあるが、決してそうではないと。年を取る、あるいは人口が高齢化するということが、すなわちプロダクティブが落ちるというわけではない。

年を取ったほうが経験も活かされてむしろプロダクティブになる面もある。にもかかわらず、プロダクティブが落ちる可能性があるのは、そうさせるしくみや人々の考え方に問題があるからだ。

博士の考え方で私が特に感銘を受けたのは、長期楽観・短期悲観的なスタンスと

いか対応方法である。プロダクティブ・エイジングは、長期的には非常にポジティブな考え方なのだが、それを実現するためには、短期的には様々な障害があり、場合によっては人の考え方や価値観を180度変えなければならぬような、大変な困難を伴う。短期的に見れば非常に困難なのだが、しかしそれを丁寧に一つ一つクリアしていくことで、その先に目標が達成できるという長期的ビジョンがある。

この長期楽観・短期悲観というのはとても正しいスタンスであり、他の場合にも応用できることだと感心した記憶がある。

ところで、高齢者が生きがいを持つには、まず生きがいを持てる場を作ることが大事

だが、一方で、自らのアイデンティティを仕事と一体化させ過ぎると、仕事を失ったときのアイデンティティ喪失につながってしまう。

バトラー博士が、収入を伴わない社会参加、アクティビティについてどのような評価をされていたのか、もう少し伺いたかった。

**大津** ● 実は私も同じ疑問を持ち、2008年の取材の際にうかがってみた。「極端な話、寝たきりの人はプロダクティブたり得るかどうか、どのようにお考えですか」と。博士の答えは、プロダクティブ・エイジングとは自分の全存在を肯定すべき概念であって、無償・有償はもちろん、具体的に何かを作り出したり、提供できるかどうかということとはまったく関係ないとの答えだった。

日本への示唆として、元々日本にはみんな働いていた文化があるのだから、今後NPOや財団等の活動に期待したいという話をされていた。

**清家** ● プロダクティブの定義を非常に広く考えておられたと理解できる。

**大津** ● プロダクティブという言葉が、目に見える、特に金銭と置き換えられがちなので、僕も記事を書くとき、気をつけるよう心がけている。プロダクティブ・エイジングが、健康で能力のある人たちだけの話だと外れてしまうと、博士が提唱し続けたことと外れてしまう。

**清家** ● ノーマライゼーションという考え方があるが、年を取っても、障害があっても普通に生活しているということは、実はメディアにとっても研究者にとってもある意味退屈な話で、あまり大きく取り上げられる対象にはならない。しかしそれが非常に大切であることを、バトラー博士はよく理解しておられたと思う。実は一歩間違えると当たり前でつまらないと思われがちなることを、非常にインプレッシブに伝える才能がある方でもあった。

### 日米の ILC 設立と両理事長

**清家** ● バトラー博士の功績は数え切れないが、高齢化を先進国共通の問題と認識して、お互い学べるようにと世界各国にILCを

設立された意義は大きかったと思う。特に日本について非常にポジティブに評価していたので、その方を失ったのは、日本にとっても大きな損失である。

ILC日本の初代理事長であった伊部英男先生とは、お互いに尊敬されていた仲であったが、伊部先生も10年前に亡くなられ、高齢化に関するグローバルな視点を持った卓越したオピニオンリーダーを失ってしまった、という感を禁じえない。私は、伊部先生はその晩年しか存じ上げないが、物事を虚心坦懐にご覧になる方だった。ご自身は厚生省のご出身で日本の社会保障政策について、皆保険制度の導入や年金制度など様々のことをやってこられた方だが、良いものは良い、失敗だったものは失敗だったと、非常に潔く評価される方だった。

豊富な知識をお持ちでありながら、その知識や経緯にとらわれずに常に大きな視点から、客観的に日本の社会保障制度のあるべき姿を考えておられた。そのあたりがバトラー博士と通じるところで、意気投合したのではないだろうか。伊部先生のことでは印象に残っているのは、森戸英幸教授と一緒に、アメリカの年齢差別禁止法について、日本への応用の問題点なども含めてまとめた報告書を、非常に喜んでくださったことだ。我々としても苦勞した甲斐があった。

**大津** ●日本で初めての報告書だったと思う。

**清家** ●よくありがちな、あらかじめ自分の推測やストーリーに沿った報告書ではなく、本当のことを知りたいので調べてほしいというその姿勢が、とても印象に残っている。先入観を持たずに事実を確認し、実証に基づいて問題を解決していこうという真摯な態度を崩されない方だった。

**大津** ●実証を重んじるのは、バトラー博士も同様だった。ドラマやコマーシャルに出ている高齢者の割合をデータとして抽出して、人口比に比べて登場する割合が非常に少ないと報告された。また高齢者を過度の笑いや侮蔑の対象としたコマーシャルに関しては、その内容をチェックし問題点を指摘していた。観念ではなくまさにエビデンスに基づ

く手法で、非常に説得力があった。

先ほどのメディア教育プログラムの例でも明らかなように、医師であると同時に、非常にジャーナリスティックな一面も持ち合わせていたと思う。

## 考えの根底は生い立ちに

**清家** ●バトラー博士は両親の離婚後祖母に育てられたことや、早くに祖父が亡くなって祖母の苦勞を見てきたことなど、幼い頃に自立心の強い高齢の人を身近に見ることのできる環境にあったことが、考え方の形成に強い影響を与えたのではないかと想像している。

**大津** ●まったく同感だ。博士は40年前にエイジズムという言葉を作り、それからひたすら言い続けたわけだが、そもそもそのことをなぜずっと言い続けてきたのかと、取材する側として興味深く思っていた。

勝手な推論だが、祖母が貧困の中でも強い意思と決断で生き抜いたことに、人生の教訓や知恵の原体験があったのではないかと思う。しかしそのような個人の経験と、現実社会における高齢者への認識や理解との間の大きなギャップに、強い疑問と怒りを感じたことが、「エイジズム」をテー



医師であると同時に非常にジャーナリスティックな一面も持ち合わせていた。

マに掲げ続けた原点ではないかと。今度お会いしたら、原動力の源をぜひ伺ってみたかった。

**清家** ●ホテルを焼け出されてホームレスのようになった祖母が、孫をコロンビア大の医学部に入れるまでには、言葉では言い表せないような苦勞があったと思う。常に前向きで意思を強く持って困難を乗り越えてきた祖母の存在は、博士にとってはきっと誇るべきものであったろうと想像される。

博士が高齢者の問題を語るときに、社会保障制度や経済成長の点だけでなく、高齢者自身のディグニティを保たなければならないと強調したのは、そうした生い立ちによるところも大きいのではないかと。



プロダクティブ・エイジングは自分を全肯定する概念だと、非常に広義にとらえていた。

## メンターの重要性

**大津** ● バトラー博士が生涯言い続けた考えを、日本で実践しようとするとうどうなるか。日本では高齢者＝介護される人ととらえられがちだが、実は普通に生活している人がほとんどだ。しかし、メディアに登場する高齢者はかわいそうな高齢者か、スーパーおばあちゃんと極端で、報道する側も無自覚なだけに問題は根深いと感じている。

高齢者というだけで、無条件で保護しなくてはいけないとなると、そうでなくても厳しい若者世代の負担増につながり、世代間対立の原因になりがちだ。そのような意味からも、高齢社会の様々な課題を、高齢者個人や世代を超えたオールジャパンの問題として考えていく姿勢が必要だと思っている。伝える側も受けとる側も、若いから元気、年寄りだから介護というステレオタイプから抜け出さなければならない時代を迎えている。

**清家** ● 政治の場でも、若手は純真、ベテランは腹黒いといったワンパターンでとらえる構造があるが、これも根っこは同じことだ。日本の政治では、これまで老害がかなり跋扈していたことも事実なので、アンチテーゼとしてことさら若返りが言われることは理解できるのだが、世代のバランスやベテランへの敬意はやはり大事なことだと思う。

バトラー博士は、むしろ年を取ってきたほうが勇気を持って何かすることができると

言っていた。若い人はこれからのことを考え慎重になることもあるだろうが、年を取って経験を積み立場が確立してくると、失うものがなくなってきて思い切ったことができる。

だから、仕事上でのベテランと若手を組み合わせる「メンター」制度には、重要な意味があると思う。直属の上司と部下の間柄だと、評価する側・される側という関係性があって、若手も素直にわからないことを聞きづらいが、年の離れたベテランだと安心して聞けたりする。ベテランにとってもライバルにはなりえない若手への技術の継承ということ

なので、自分の持っているものを若手に、なんの心配もなく全部教えられる。

若い人を育てるうえで、ベテランが果たす役割は大きいと思う。

**大津** ● 実際にあるファストフード店でも、高齢者を雇っている。採用にあたっては、いろいろ議論もあったのだが、スタートしてみると、若いバイトの相談にのってあげたり、お客さんとの間の取り方が絶妙だったり、店が活性化し、売上も伸びるといったケースがある。効率重視で雇ったのではないが、結果として売上も生産性も上がっていくということからすると、高齢者は負担どころか資産と言える。こうした面を活かしていくことが、バトラー博士の考えの実証となるのだと思う。

日本では、今全員参加型社会が否応なしに求められているが、当然能力のばらつきは大きいし、得意不得意も様々だ。全員参加型にするためには、ユニバーサルな視点での環境整備が求められるわけだが、こうした環境は、高齢者に対して働きやすい環境となるだけでなく、働きやすさという点で、実は社会全体の支え手を増やすという意味でも、非常に重要な要素になってくる。

**清家** ● おっしゃるとおりだ。年を取ると、効率が落ちる、協調性がなくなるなどネガティブな要素も出てくると言われるが、仮にそうだとしてもそのような要素を持ちながらも、社会参加が続けられる方法を考え出していくことが大事だ。そうすることで、さらに大きくてしなやかでしかも強い社会基盤が作り上げられる。

## 日本における今後の課題

**清家** ● エイジズムはよくない、年齢定年制はよくないとはバトラー博士も繰り返し言っておられるし、我々ももちろんわかっているのだが、では一方で、年齢に替わる基準は何になるのだろうか、と考えると悩ましい部分もある。

**大津** ● 確かにそれが大きな問題だ。年齢差別禁止が実現した社会というのは、言い換えれば厳密な能力社会だ。大リーグのよ

うなもので、能力のある人は高い年俸をもらえるかもしれないが、そうでない人は、クビになるかもしれない社会。そう考えると、働く側からみれば、定年制とは普通の人が住宅ローンや教育費を払いながら生き延びていくうえで欠かせない手段ともいえる。

企業側にしても、定年は大量の合理的な解雇手段という面があり、それができる故に新規採用が可能になるという側面もある。だから、企業だけに定年制をやめろといっても、私企業の論理では辛いものがあるのも事実だ。

**清家** ● 性別・人種・年齢による差別禁止というのは、裏を返せば徹頭徹尾、能力を見る、能力でしか見ないということだ。会社にとって役立つパフォーマンスがなければ、辞めてもらいますよと。日本人のメンタリティを考えたときに、それをすんなり受け入れることができるかどうか。

一方では定年までは雇用が確保され、また年齢に応じて昇給するしくみがあるのだから、その代償として定年があるのはしかたがないという考えも成り立つわけで、社会がどのような方向を選択するのか、そこがこれからの日本の大きな課題になってこよう。

**大津** ● 本当にそこに尽きる。

現状では、成果主義が必ずしも十分に成果をあげているとは言えず、ともするとリストラ的手段として使われている。

クビにするのも、公平性、納得性、透明性の点において課題があるので、年齢軸に替わる基準がない中で今これを外して成果主義のみになってしまうと、おそらくは経営者の都合のいいふうに使われる恐れがある。

**清家** ● 若い人に限らず、人間は常に成長するという考えれば、その成長に応じて雇用機会が与えられ、給与も上がるというのが理想的だ。

就職していきなり能力成果主義にするのではなく、先輩が後輩に仕事を教えて、一人前になるまでの最初の10年程度は、年功賃金のほうがいいと思う。仕事を教える先輩のほうが、教えられる後輩よりも賃金が高いしくみは当然必要だ。そして、一人前

になったらよりフラットな賃金カーブにしていこうというような調整をする。

折衷案かもしれないが、やはりアメリカのようなガリガリの能力成果主義は、日本の社会にはなじみにくいし、アメリカほどには年齢差別禁止は徹底できないかもしれない。

**大津** ● 現実的にはおそらく清家先生が言われたようになっていこう。そうすると途中から賃金が上がらない時代になる。賃金が上がらないと困るのは、住宅費と教育費が払えなくなることだと思う。

個人的には、住宅と教育については、公費負担を増やすなど、国が企業に代わってフォローするしくみを作ればいいと考えている。住宅も教育もすべてを企業の賃金だけでやっていこうとすることが、非現実的になっているのではないだろうか。

財源の問題はあるが、賃金の上昇カーブが緩やかになっても、公的な財源を入れることによってある程度は生活が成り立つようなしくみを作っていくことが大事だ。こうしたモデルを作り上げる時期にきているのではないかと。

**清家** ● それは先ほど大津さんがおっしゃっていたように、世代間対立も解消できるような方向性だと思う。バトラー博士とこのようなことも議論してみたかったと思うが、それがもう叶わないのは非常に残念だ。

ともすると変わったことが耳目を引きやすいが、高齢者が増えるということは、高齢者



高齢者が普通に暮らせる社会。彼が言い続けてきた当たり前のことを伝え続ける義務がある。

が特別な存在としてではなく普通に暮らせる社会を作るといふごく当たり前のことなのだ。

バトラー博士が繰り返し言い続けたように、その当たり前のことを説得力を持ってきちんと伝えていかなければならない。

そして日本という国で博士の遺訓をどのように応用し実現化していけるのか、我々はいくつもそのことを考え続け、努力していく義務があると思う。

〈2010.08.25〉